

2020年01月17日 8面

文字サイズ 小 中 大 [ブックマーク](#) [印刷](#) 

大林道路東北支店／積載量表示ダンプを導入／6号舗装補修に、作業・運搬効率アップ



荷台前方のデジタル表示計



切削ガラを積み込むスケールダンプ

大林道路東北支店は、積載量の上限まで積み込めるダンプトラックを国道6号の舗装補修工事の現場に導入し、14日夜に作業現場を公開した。荷台の下に計量装置を取り付け、正確な積載量をリアルタイムで表示するダンプで、積載能力を最大限に活用できる。ダンプの運行台数を削減できるほか、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量の低減にもつながり、同支店では今後も積極的に利用したいとしている。

計量装置を搭載した「スケールダンプ」は、同社と運送会社の大煌工業（埼玉県川口市）、特装車大手の極東開発工業（兵庫県西宮市）が共同で開発。同社東北支店は東北地方整備局磐城国道事務所が発注した「2019年度双葉地区6号維持補修工事」（福島県広野町～浪江町）を受注し、支店管内で初めてスケールダンプを導入した。

ダンプには重量を感知する「ロードセル」と呼ばれる計量装置を搭載し、荷台の前方と車内にデジタルの表示計を設置。積載量は10キロ単位で表示され、ドライバーや積み込みの作業員は積載量を確認しながら積み込み作業に当たることができ、過積載を防止できる。積載能力をフル活用した運用が可能になり、運搬効率の向上や余剰な運行台数の削減が実現できる。時速5～8キロの低速走行でも計測できるのも特徴の一つで、より効率的な積み込み作業を可能にする。

現行の方法では過積載を防ぐため、マーキングで積載量を管理しているが、スケールダンプを導入すればマーキング作業をする必要がなく、人員や作業時間も削減できるという。

14日夜から国道6号下り車線で始めた切削工事には7台のスケールダンプを投入。大型切削機が移動しながら砕いた切削ガラをダンプに積み込み、表示計の数値が予定の積載量になるのを確認した。延べ25台が約220トンの切削ガラを積載し、15日早朝に作業を終えた。

[閉じる](#)

記事ID：3202001170804

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます